

## 【研究ノート】 国際手話および主要国手話の 相互比較

小倉和夫

### プロローグ

「国際手話」なるものを、異なった言語や文化をもつ国民同士あるいは民族間で、言語によるコミュニケーションが困難な場合に用いられる手振り、仕草で、お互いがその意味を理解できるものと見なすと、その源流は、西欧ではローマ帝国にまで遡るといふ(注1)。すなわち、皇帝ネロが異民族の王に、何が最も土産として欲しいかと尋ねると、王は、「自分の領地には多くの異なった言葉話す人々が住んでおり、王の意思がなかなか伝わりにくいので、身振り手振りで理解させたく、ローマ帝国の著名なパントマイムの俳優を土産にもraitたい」と述べたと言われる(Brun, 1969, p.25)。

また、アメリカ大陸の先住民の部族間、あるいは、植民地として進出してきたヨーロッパ人と先住民との間で「手話」が利用されたとも言われ(Emmorey & Reilly, 1995, p.334)、そうした「手話」は、どこまで正確に意思疎通ができたかには疑問もあるが、国際的な手話の活用であったともいえる。さらには、フランスのろう者フェルディナンド・ベルチエによれば、1850年代に国際的な宴会において、各国の人たちが手話で話し合ったともいわれる(Rosenstock & Napier, 2016, p.25)。

けれども、こうした例は、特定の国ないし民族の用いていた身振りや手振りが国際的にいわば活用されたもので、共通の意思疎通の手段として相互に公式に認められた形で使用されたものではなく、その意味ではいわば自然発生的な試みであって、国際的な「共通言語」としての国際「手話」とは言い難い。

意図的に国際的な「共通言語」としていわば「作られた」かたちの「国際手話」を作る動きは、通常、1924年のサイレント・スポーツ大会に始まり、1951年の第1回世界ろう者会議において、世界ろう者連盟(World Federation of the Deaf)の下に「手話統一委員会(The Commission of Unification of Signs)が設けられたこと、そして、1975年には英国ろう者協会が中心となって「GESTUNO: International Sign Language of the Deaf」と題する約1500の語彙からなる辞書まで作成し、世界ろう者連盟から出版さ

れたことが嚆矢と言われる。しかし、Gestuno は、国際会議で使われたものの十分な意思疎通に成功せず、一部の人々によって私的に使われるに止まったとされる。その後、デフリンピックをはじめ、国際的文化・スポーツ行事などで「国際手話」を用いる「通訳者」が登場し、次第に国際手話が「標準化」されていったとされる (Rosenstock & Napier, 2016, p.4-50, 19) (注2)。

今日デフリンピックなどで使用される国際手話と各国の手話との類似性については、英国手話に類似した面が多いとの意見もあるが (Rosenstock & Napier, 2016, p.6), 英国に限らず欧米各国の手話との類似性が高いとする見方もある。けれども、今日においても、国際手話は特別の機会に特定の人々の間で用いられるだけであり、日常、常にこれを用いる集団が存在するわけではないところに、国際手話のいわば弱点があると言えよう。

こうした背景もあり、本論では、第一に、国際手話と日本、米国、英国、仏国の手話について、約50の日常表現における類似性を、いわば例示的に検討した。次に、アジア諸国間の手話の類似性の有無を見るために、日、中、韓三国の手話の比較を行った。なお、本稿において、日本の手話の例は日本語対应手話を取り上げている。

## 1. 国際手話と日本、米国、英国、仏国の手話の比較

まず、国際手話について、全日本ろうあ連盟発行の『Let's Try 国際手話』第1巻と2巻に収録された、約1000前後の表現のうち、日本に特有の物産、食物、地名、などを除き、比較的に日常会話でよく使用される動詞、名詞、形容詞、疑問詞を抽出し、かつ、国際比較上、各国においてその概念に大きな違いのないもので、同時に、各国(日、米、英、仏)の手話辞典における比較が容易に行える概念あるいは表現にしほり、約100余りの言語表現に対応する手話表現を比較してみた。

なお、使用した各国の手話辞典及び国際手話辞典は次の通り。

日本：全日本ろうあ連盟『わたしたちの手話学習辞典Ⅰ』, 「Let's try 国際手話」編集委員会編 (2019) 『Let's try 国際手話』全日本ろうあ連盟, 「Let's try 国際手話」編集委員会編 (2020) 『Let's try 国際手話2』全日本ろうあ連盟。

米国：Sternberg, M. L. A. (1998). *American Sign Language Dictionary*. Harper Perennial.

英国：British Deaf Association. (1992). *Dictionary of British Sign Language* /

English. Faber and Faber.

仏国 : International Visual Theatre. (2009). *Le Poche Dictionnaire Bilingue: LSF/Français*. International Visual Theatre.

(1) 国際手話と主要国の手話が同じあるいはきわめて類似している例

一般的に、概念ないし事物を動作や手の動きによって容易に把握できるようなもの(言語の上では【名詞】や【形容詞】)には、各国の手話表現と、国際手話とが同一あるいはほぼ同じ場合も散見される。

1 【動詞】で、国際手話と日本、米国、英国、仏国の手話の形態がほぼ同じものとしては、たとえば「歩く」がある。

	国際手話	日本手話	米国手話	英国手話	仏国手話
歩く					

図1 歩く

2 【名詞】で、国際手話、日本、米国、英国、仏国4ヶ国の各国手話が、ほぼ同一のものとしては、たとえば、家、鍵、体、電話などがあげられる。

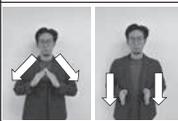
	国際手話	日本手話	米国手話	英国手話	仏国手話
家					
鍵					
体					
電話					

図2 家, 鍵, 体, 電話

3 また、【形容詞】で、国際手話、日本手話、米国手話、英国手話、仏国手話が、同一又は類似している例としては、「大きい」がある。

	国際手話	日本手話	米国手話	英国手話	仏国手話
大きい					

図3 大きい

(2) 国際手話と、日、米、英の三ヶ国の手話が同一またはごく類似している例 (すなわち仏国手話だけは別のもの)

1 【動詞】としては、「会う」「飲む」などがこれにあたる。フランスの手話には、会う「meet」にあたるものは見られないが、これには、仏語ではそもそも出会う「rencontrer」という動詞はあるが、見る「voir」との重複あるいは差異が微妙であり、英語の「meet」にぴったりあてはまる言葉を見出し難いという概念上の問題も影響しているともみられる。ちなみに仏語で面会を意味する名詞「rendez-vous」の手話表現は、国際手話の「会う」とは全く異なっている。また、「飲む」の手話表現も、日、米、英はほぼ同一であるのに対して、仏国手話は若干異なっているが、これは、フランスでは「飲む」対象として水ではなくワインを連想しているからとも考えられる。

	国際手話	日本手話	米国手話	英国手話	仏国手話
会う					
飲む					

図4 会う，飲む

2 【名詞】では、「飛行機」、「部屋」などがあげられる。仏国手話の「飛行機」は、飛び上がるのではなく滑走路を走る形で表現されている。仏国手話では、そもそも日本語の「部屋」にあたる言葉としては、「piece (ピエス), salle (サル), chambre (シャンブル)」があるが、手話表現としては、主として寝室の意味に使われているシャンブルに対応する表現のみがあり、寝る仕草の形となっている。

	国際手話	日本手話	米国手話	英国手話	仏国手話
飛行機					
部屋					

図5 飛行機，部屋

(3) 国際手話と日，英，仏の三ヶ国の手話は類似しているが、米国手話だけが異なっている例

【動詞】では、「行く」があげられよう。一つの推測として、米国の場合「行く (go)」が「歩く」動作よりも、車で移動することを連想しがちであるためとも考えられる。ちなみに、米国の手話には、命令の意味での「go」が別にあり、その形は、次のように、日，英，仏の「行く」の手話表現に似ており、こうした命令の「go」と区別するためもあって、「行く」という動作そのものの形は日，英，仏の手話と異なっているとも考えられる。



図6 行く

(4) 国際手話が日本手話とは違っているが、米、英、仏の手話とは似通っている例

- 1 【動詞】としては「入る」がある。ちなみに、日本手話の「入る」も併せて表示すると次のようになっている。



図7 入る

- 2 同じような現象は、「知る」にもみられる。ちなみに、日本手話の「知る」の表現も併せて表示すると次の通り。



図8 知る

- 3 【名詞】で国際手話と米、英、仏の手話がよく似ているが、日本手話とは異なっている例としては、「女」、「警察」などがあげられる。こうした類似性は、西欧社会においては、女性は伝統的にはボンネット風の帽子をかぶるので、その帽子の紐の連想からきたものと言われている。なお、「男」については、国際手話と米国手話は、やはり帽子の連想からのもので、類似している。他方、英国、仏国の「男」についての手話は、次のように国際手話とは異なっている。また、「警察」については、国際手話と米、仏の手話は類似している。なお、英国手話は手錠を暗示するかのよう形となっている。

	国際手話	日本手話	米国手話	英国手話	仏国手話
女					
男					
警察					

図9 女, 男, 警察

4 「警察」の例のように、国際手話と米国および仏国手話が類似しているのに対して、英国および日本手話がこれと異なっている例としては、他に、【疑問詞】の「何」があげられる。

	国際手話	日本手話	米国手話	英国手話	仏国手話
何					

図10 何

(5) 国際手話と、日本、米国、英国、仏国のいずれの手話表現とがかなり異なっている例

これまで、国際手話と各国の手話の類似性がどこまで、どのように観察できるかを見てきたが、多くの国際手話の表現は、日本、米国、英国、仏国のいずれの手話表現ともかなり異なっているものも少なくない。たとえば、日常用語のなかで、国際手話が、こうした各国の手話と異なっている例としては、下記のように【動詞】では、「待つ」「忘れる」、【名詞】では、「名前」「タクシー」、【疑問詞】では「いつ」などをあげることができよう。(もとより、類似性あるいは同一性は、手話の形と動きをどこまで正確に比較するかによって異なってくるが、ここでは、動作の形と印象から、類似性を判断した)。

	国際手話	日本手話	米国手話	英国手話	仏国手話
待つ					
忘れる					
名前					
タクシー					
いつ					

図11 待つ、忘れる、名前、タクシー、いつ

## (6) 国際比較からみた手話の特徴

以上のごとく、国際手話と欧米数ヶ国および日本の手話との比較を試みてみると、各国の手話と国際手話の関係のほか、各国の手話、さらには、手話そのものによつて異なる特徴ともいえるものもいくつか浮かび上がる。

一つは、指文字の問題と関連している。国際手話にもアルファベットはあるが、これは国際手話独自のものではなく、若干の微妙な違いを除いて、たとえば米国手話と同一である。こうした指文字を使うことは、欧米語を国際手話に持ち込んだので、真に国際的といえるかには疑問がある。他方、実際には、国際手話では、指文字を日常用語の一環として使うことはあまりないようである、たとえば、米国の手話ではタクシーを表現するのに、指文字の「T」をかかげながらハンドルを回す形がとられることがあるが、国際手話ではそうした表現は用いられず、手をあげて車をよぶような表現が一般的である。

また、日本手話では、「入る」の手話には、指文字で漢字の「入」をさすサインを作つて示すが、そうした指文字の使用は、漢字文化特有のものといえよう。

このことは、通常の言語と手話との関係について、微妙な問題を提起する。すなわち、アルファベットのような、文字自体には意味を連想させる形がない言語とちがいで、漢字のように、文字の形態自体に意味がこめられている場合、その形を指で示すことによつ

て、コミュニケーションを図ることは可能であり、たとえば、空中で、指で漢字を形づくることも一種の手話ともいえる。

このことは、言語と手話との関係について微妙な問題を提起する。そもそも、身振り手振りは、言語によるコミュニケーションにおいても、いわば、補足的に、非言語コミュニケーションの手段として用いられる。「あきれた」といいながら両手をひらく動作をすれば、その動作は、言語表現を強める、あるいは、それに一部代替する意味を持つ。いいかえれば、ある種の身振り、仕草は、言語表現と一体化している場合が少なくない。そうした身振りや仕草と手話表現との関係をどのようにとらえるかは、観念的にはある程度明確であるとしても（齊藤，2007）、実際には微妙な問題といえよう。

他方、国際手話と各国（この場合、日、米、英、仏）の手話との類似性をみるに、

国際手話と日、米、英の手話が類似するが、仏の手話が異なる

国際手話と日、英、仏が類似するが、米が異なる

国際手話と米、英、仏が類似するが、日が異なる

国際手話と米、仏が類似するが、日・英が異なる

いずれの国の手話とも国際手話は異なる

といった分類が可能であり、一概に、どの特定国の手話が国際手話に多く取り入れられているかは、限定的な数の比較ではにはわかには判断しがたい。いずれにせよ、国際手話の国際性とは何かを、改めて検討することが必要であろう。

そもそも手話は言語と異なり、仕草、身振り、手の動きによるものだけに、各国で共通あるいは類似したものも少なくなく、ろう者のなかには、デフリンピックにおいて、各国選手とのコミュニケーションはそれほど難しくなく、むしろ一体感を強めることができたとの声があることに注目すべきであろう。ある意味では、手話は、通常の言語よりも国際的に共通性があるともいえよう。

他方、各国の手話にはそれぞれの文化的、あるいは歴史的伝統や独自の生活習慣が反映されており、そうした点を国際手話が捨象した場合、国際手話自体が、文化的香りを持たない、無機質的なものとなるおそれがあることをどの程度考慮すべきかは、微妙な問題のように思われる。

## 2. 日中韓三国の手話比較

上記のような、国際手話と英、米、仏、日の手話との比較は、欧米の手話と国際手話との関連、並びに、同じ欧米圏でも、英米と仏の違いなどを浮き彫りにする上で役立つ。

他方、歴史的、文化的に深い関係のあった、日本、中国、韓国の手話の類似性を見ることは、三ヶ国の手話のなりたちを考える上でも参考となると考えられる。また、元々はいわゆる漢字に体言された概念が、手話では国別にどのように違っているか（あるいは同一であるか）を観察することは、日本、中国、韓国三ヶ国の音声言語上の類似性と、手話言語上での類似性を比較する上でも参考となろう。

日本、中国、韓国の手話言語の日常用語につき、（音声言語上の）【動詞】、【形容詞】、【名詞】につき、各々10前後の語句を以下に比較してみた（ただし、三ヶ国の音声言語自体を比較すると、たとえば、「ない」は日本語では【形容詞】であるが、韓国語の「ない」（オプタ）は【存在詞】であることなどの違いがあり、音声言語を基礎にして、それに相応する手話を比較することが、三ヶ国の言語構造をこえた、文化的相違をどこまで暗示しているかについて、軽々しい判断はし難いことは念頭においておく必要があるう）。

なお、この節において用いた文献は以下のとおりである。

中国：中国盲人聋哑人协会编。（1979）. *聋哑人通用手语图 第一辑*, 中国盲人聋哑人协会编。（1979）. *聋哑人通用手语图 第二辑*, 中国盲人聋哑人协会编。（1980）. *聋哑人通用手语图 第三辑*,

韓国：한국농아인협회 대구광역시협회, (2024), *참 쉬운 수어*, 준커뮤니케이션즈.

### (1) 三ヶ国の手話表現がほとんど同じ例

三ヶ国の表現がほとんど同じものとしては、例えば、【名詞】では「家」、「電話」、【形容詞】では「痛い」などがある。いずれの国の手話でも「家」は、両手を屋根の形にしたもので表され、また、電話は親指を耳に、小指を口にあてて電話器を想像させる形であり、国際手話と同じである。また「痛い」は、痛む場所に、軽くものを掴むような形にした右手（日本および韓国手話では5指、中国手話では親指、人差し指、中指の3指を折り曲げた型）を触らせる形が共通である。

(2) 日韓の手話がほとんど同じで、中国手話は違う形の例

他方、日韓の手話がほとんど同じで、中国手話は違う形のものとしては、例えば、次のようなものがある。

「友人」「新しい」「同じ」「忘れる」

「友人」をみると、日本・韓国の手話では、下の左図のように両手を組み合わせるが、中国手話では、両手で親指をたてた拳をつくり、それを下図右のように相互に近づける。

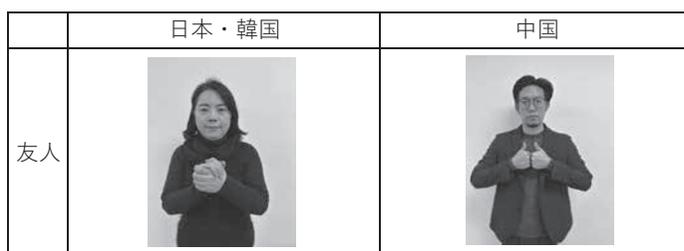


図12 友人

「新しい」については、日韓は、下図左のように、甲を前に向けた両手を開きながら下げる動作であらわすが、中国手話では、下図右のように、親指をたてた右手を左手甲の上を右に滑らせる動作であらわす。



図13 新しい

「同じ (同様)」についてみると、日韓では、下図左のように、両手の親指と人差し指を上に向けて左右に並べ、同時に指の開閉をくりかえすことで表すが、中国手話では、下図右のように右手の人差し指と中指を伸ばし前後に行き来させる。

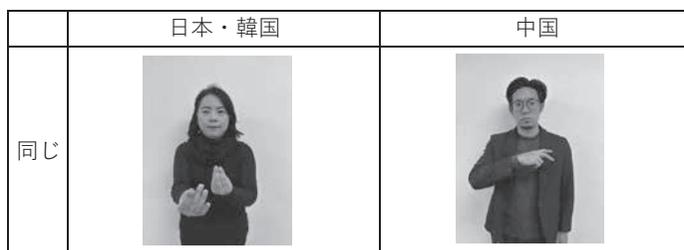


図14 同じ

「忘れる」という動詞の手話表現を見ると、日韓では、こめかみの脇から右手の拳をあげながら開く動作となるが、中国手話では、下図のように、額にあてた手を頭の後へ回転させる動作となる。



図15 忘れる

### (3) 日本と中国の手話の形が同一またはごく類似しているが、韓国の手話は違う例

日本と中国の手話の形が同一またはごく類似しているが、韓国の手話は違う例としては、大きい、食べるなどがあげられる。

「大きい」については、下図のように、日本と中国の手話では、モノの大きさを象徴するように、指をやや曲げて広げた両手の掌を向かい合わせて左右に開くが、韓国手話では、韓国語で「大きい」を意味する「クン (큰)」の語頭音「ク (k)」に対応するハングル文字「ㅋ」を指文字で表した後、軽く握った拳の親指を立て、左から右へと動かす動作を加える。

	日本・中国	韓国
大きい		

図16 大きい

「食べる」については、日中では、掌を上むけた左手から右手の2指（人差し指と中指）を日元へ運ぶ動作をするが、韓国手話では、右手の掌を上に向けそれを口元へもってゆく動作となる。

(5) 日本, 韓国, 中国それぞれ違う例

日本, 韓国, 中国それぞれ違う例は多々あるが、日常用語で興味深い例としては、「男」「女」「名前」があげられよう。

	日本	中国	韓国
男			
女			
名前			

図17 男, 女, 名前

こうして、日、中、韓三ヶ国の手話を、(限られた日常用語についてだけであるが)

比較してみると、音声言語で同じ意味の手話が、日本と韓国では類似しているケースが少なくないことが分かる。他方、日中、中韓の間では同じ意味の手話の形が同一またはそれに近い例は少ない。

また、興味ある点の一つは、日本手話では、「入る」、「北」などの意味の手話に、各々漢字の「入」「北」を指の形で表す方式をとっているが、中国手話では、いずれも、それを意味する漢字とは全く異なった形の手話を用いていることである。他方、韓国手話では、「入る」について「入」という漢字の形は使っていないが、「北」については、日本手話に類似して（指の数に違いはあるが）漢字の「北」を連想させる形をとっている。

このように、漢字（比較的単純な形のもの）の「形」を指あるいは手を用いて表すことによって、その概念を手話で表現するというやり方が、日本、韓国、中国各々の手話においてどの程度存在するかを見ることは、手話と音声言語との関係を見る上で、有益かもしれない。

もっとも、モノについて、アルファベットの文字を指文字にして表現するものもあること（例えば日本手話ではWの指文字でウイスキーやワインを表現することや、米国手話でTを出してタクシーを表現すること）を考えると、漢字にかぎらず、アルファベットや仮名も含め、指文字の手話における機能をどのようにとらえるかという問題がそもそも存在すると言えよう（齊藤，2007，p.74-75）。

#### 注

- (1) 本来、こうした「仕草」は、言語とは区別されるべきものであるが、国際手話のなりたちとの関連では多くの関連文献がこうした過去の事例に言及していることに鑑み、ここではそれに言及した。なお、「しぐさ（ジェスチャー）」と手話の相違については、齊藤くるみ（2007）p.20 参照。
- (2) なお、Gestuno の使われ方や特徴については、齊藤くるみ（2009）参照。

#### 引用文献

- 齊藤くるみ（2007）『少数言語としての手話』東京大学出版会。
- 齊藤くるみ（2009）「視覚言語の交差点—国際手話の形成と展開」木村護郎クリストフ・渡辺克義編、『媒介言語論を学ぶ人のために』世界思想社。
- Brun, Theodore. (1969). *The international dictionary of sign language; a study of human behavior*, Wolfe.
- Emmorey, K., & Reilly, J. (Eds.). (1995). *Language, gesture, and space*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Rosenstock, R., & Napier, J. (Eds.). (2016). *International Sign: Linguistic, usage, and status issues*. Gallaudet University Press.

## **【Research Note】 “A Comparative Analysis of International Sign and National Sign Languages”**

OGOURA Kazuo

The Deaflympics are organized and operated primarily by Deaf people themselves, and as a result, international communication during the games and in their administration is conducted using what is known as International Sign. However, International Sign is not usually used within each country, where sign languages shaped by each nation’s unique historical, cultural, and linguistic traditions are used.

Although International Sign is officially regarded as culturally neutral and devoid of specific national characteristics, in practice, it appears to be heavily influenced by the languages and cultural traditions of Western countries. This article seeks to demonstrate this point by comparing International Sign with British, American, and French sign languages, focusing on commonly used everyday vocabulary to examine similarities. For reference, Japanese sign language is also included in the comparison.

Furthermore, to explore the degree of similarity or difference among national sign languages influenced by their own cultural and linguistic traditions, the article also compares Japanese, Chinese, and Korean sign languages, focusing on everyday terms.

The Japanese sign language discussed in this article is Manually Coded Japanese (MCJ).